

巻頭感 書を求める切なる心

——創立時の『講義録』に寄せて——

図書館長 市川 訓 敏

関西大学の年史資料展示室に、百二十年前の大学創立当時、学生たちが講師の講義を筆写し、学校が講義録として頒布したものが、今に大切に伝えられ、何点か展示されている。新知識に接した当時の学生が、それらの講義録を食い入るように見入ったことが目に浮かぶ。それらの新知識は、いかにも新鮮に映ただろうし、講義録は宝物のような扱いを受けたに違いない。

ほんとうに必要な書物を手に入れたときの喜びは、何物にも代えがたい。歴史的に有名なことであるが、中国で組織的に密教を学び、多数の經典類を日本に請来した空海に対して、その少し前に天台教学を修め、中国から帰国していた最澄が、密教の重要性に目覚め、なりふり構わず、空海に密教經典の借用を再三にわたって申し込むという事実がある。司馬遼太郎さんの『空海の風景』は、この間の事情を考察したもので、その後の日本の国の形を作った両巨人の切実な思いは、私たちに強く訴えかけるものがある。

最澄の比叡山延暦寺にしても、空海の高野山金剛峯寺にしても、戦国時代に日本に来た宣教師の目には、「大学」として映っていた。宣教師が大学と考えたのも不思議ではない。そこには膨大な知識が集められ、数多くの学僧が日夜研鑽を積んでいた。学僧たちは、ただ学んでいたわけではない。「論議法要」「論議法会」と呼ばれる厳しい試問が待ち構えていた。今日でも各本山で行われる「論議法要」は、教学に関する高度な学識を問うもので、問者と答者のディベートが延々と続き、問者答者ともに、相当な学識を要求された。互いに切磋琢磨する関係にあることが、教団の教学を支えていたのである。そういえば、日本の律令学のテキストである『令集解』も問答形式が用いられていたし、中国をはじめアジア世界でも、その例は多い。トマス・アキナスの『神学大全』も、先行の説を踏まえ、問答形式で壮大な体系を打ち立てている。洋の東西で、学を究めるために、問答形式が重視されたのは偶然ではない。今日の法科大学院でソクラテス・メソッドという双方向型授業が実施されているが、こうした対論形式は、学部教育などでも今後重視されると思う。教える側も教えられる側も、切磋琢磨する関係を作ることが緊張感のある教育研究環境をもたらすのである。

(いちかわ くにとし 法学部教授)